

開会 平成28年8月26日
閉会 平成28年8月26日

足利市総合教育会議

足利市教育委員会

平成28年度第1回足利市総合教育会議会議録

1 開催日時 平成28年8月26日(金)
開会 午後4時30分 閉会 午後5時15分

2 開催の場所 足利市役所4階 特別会議室

3 出席者

市長	和泉 聡
教育長	若井 祐平
教育委員	笠原 健一
教育委員	櫻井 淳子
教育委員	清水 尚則
教育委員	市橋 雅子

4 会議出席した事務局職員

総務部長
教育次長
行政管理課長
教育総務課長
学校教育課長
教育総務課庶務担当総括主幹
学校教育課指導担当指導主事
教育総務課庶務担当副主幹
学校教育課指導担当指導主事
教育総務課庶務担当主査

5 傍聴者 1名

6 会議日程

日程第1 議題(1)
教育現場における課題について
日程第2 議題(2)
その他

7 議事の経過

○ 開会

○ 和泉市長あいさつ（要旨）

市長に就任以来、まちづくりというのは、究極では人づくりだということを、常日頃思い、折に触れていろいろな場面で、実現すべくやって来た。その一環として、市長塾での取り組みや家庭教育懇談会などで、私なりの思いをお話させていただいている。そんな中で昨年、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」が改正になって、新しい教育委員会制度が導入された。新しい制度の導入と私自身の個人的な思いや取組というのは、期せずしてうまくかみ合っているのかなと思っている。

昨年度は、「大綱」について話し合いをして、本年 3 月に大綱を策定した。今年は、その制度が発足して実質的なスタートとなっており、学校施設をはじめとする教育環境の整備や、教育現場が抱える課題を共有して、子ども達のためによりよき方向を目指していきたいと思う。

○ 若井教育長あいさつ（要旨）

今日は、教育を行うためのいろいろな諸条件の整備ということで、特に、学校教育における課題が議題とされている。

今日の子ども達の学校教育における現状を見ると、いろいろな子ども達が目にとまる。いくつかご紹介すると、例えば、自尊感情が低下して、目標を見失い、ついつい反社会的な行動に走ってしまう子どもが見られる。あるいは、学校生活にうまく適応できなくて、個に応じた指導とか、個別支援を必要とする、そういった子ども達も見られる。中には、集団学習がなじめない、その子の姿を、寄り添って丁寧に見取っていく必要のある子どもたちの姿も見られる。また、運動がどうしてもうまくいかず、苦手で、なんとかその子に、うまく運動ができて、喜びとか楽しさを味わわせたいものだと思う子ども達もいる。生活習慣が身につけていなくて、家庭と連携を重々図っていかねばならない、そういった子ども達もいる。中には、外国籍で日本語の指導が必要だという子ども達も、今、学校現場には見られる。

どんな子ども達にも、一人一人の子ども達には、その子に応じた、適切な支援に努めて、学力保障というか、学習権の保障ができるようにすることが大切であろうと思う。

一方、先生方の様子は、全国的に自分の職務について多忙であると感じている先生方が増えて来ている。足利市においても、同様の傾向がみられる。

こういった現状を踏まえて、これからの足利市の学校教育の充実のために、行政として、あるいは学校として、家庭として、地域として、どんな役割をどう取り組んでいくかといった、その方向性が見いだせれば幸いである。

○ 日程第1 (1) 教育現場における課題について

市長

最初に(1)の教育現場における課題についてを議題にしたい。先ほどの教育長のあいさつにあった、様々な子どもの状況に応じた教育の必要性について、施策の現状について説明をお願いしたい。

教育長

足利市教育委員会の学校教育指導計画に基づいて、各学校で、実践していただいているが、足利で目指す子ども像というのは、「かしこく、やさしく、たくましく」と、「知徳体の調和のとれた子ども」、これを子ども像に掲げて、日々取り組んでいる。こういった子ども像に育つようにということで、一つ挙げられるのは、先生方を補助する、いろいろな補助職員を各学校に配置していることが、一つ施策として挙げられる。具体的には、心の教育相談員、心の教室相談員、学びの指導員、すこやか支援員、児童生徒相談員という名前で配置している。本年度は、現在、84名を各学校にお願いしている。その状況として、「こういった方々が各学校に入ってくださったことによって、授業中、集中できない子どもが、授業に参加して発言をするようになった」という話も聞いている。あるいは、友達とトラブルを起こして悩んでいた子が、仲良くその子と遊べるようになったとか、不登校気味の子が教室に入れるようになったとか、また、中学3年生で不登校であった子どもが、この児童生徒相談員がハローワークにまで一緒に付き添ったり、細かい関わりをもったおかげで、卒業後、無事就職もでき、今も元気に働いているという話も聞いている。その他、すこやか支援員のおかげで、ひとりで歩くことの難しい子が、支援員の介助を受けることによって、笑顔で学校生活を送っているという話も聞いている。どの方々も、教職員と連携を密にして、効果を上げている。今後とも、目指す子ども像の具現に向けて、一人も見捨てない教育ということを大事にしていきたいと考えている。

市長

今説明のあった内容について、ご意見、ご質問等あったら、お願いしたい。

委員

先ほど、一人も見捨てないというお話があった。全ての子ども達が、授業でしっかり学べるというのが、とても大事なことかと思う。これを教師サイドで見れば、教師が授業に専念できる、子ども達に寄り添った指導ができる環境に

なっていくことが大事なのではないかと思う。子ども達の今の状況を見ると、不登校、発達障害、虐待、非行傾向の子、睡眠障害、教室に入れない子、様々な子がいる。様々な子どもに授業を成立させるということは、どうしたらいいだろうかということだが、一つの例で、教室に発達障害、多動性障害の子がいると、その子が、突然に教室から走り出したりする。現在、教師一人では、充実した授業を行うというのは、とても難しい状況が時としてある。こういった時に、応援団として、先ほどお話のあった、学校補助職員が、どうしても必要だと思う。今、補助職員が全部いなくなったら、本当に教室の授業が成立しない教室が、たくさん出てくるのではないかと思う。

一つ目に、学びの指導員は、担任とともに教室に入れるというのが、強みだと思う。現在の配置の維持、あるいは、増員をできたらいいなと思っている。

二つ目に、児童生徒相談員については、今年 2 年目で、大変成果が出ているということで、今年、全中学校 11 人という配置をしていただいた。この児童生徒相談員のよさというのは、授業での支援もできるし、個別での支援もでき、なおかつ、保護者との相談もできるし、家庭訪問もできるという、幅広い支援ができるという、これは、中学校にとってはとてもありがたいものだと思う。これは継続して、次年度も全校配置を望むし、場合によっては大規模校については 2 名の配置も必要なのではないかと考える。その代わり、三つ目の心の教室相談員、中学校における相談員は、支援が相談室での支援という形で、幅の狭いものなので、これをカットして、その分を児童生徒相談員の方に回していくのはどうかと思う。

四つ目に、小学校の心の教育相談員は、これは授業にも入れるし、授業での支援も、あるいは個別での支援もできる。中学校と違って、授業に入れるということは、学校としてはありがたいと思う。

五つ目の小規模特認校指導員は 3 校で、それぞれ 2 名ずつ配置されているわけだが、これは単独で授業ができるというシステムが、TT とか、少人数指導で入っているようだが、とても強みかと思う。以上のような補助職員を、次年度も是非、配置をお願いできたら、ありがたいなと思う。

市長

心の教室相談員で言うと、小学校の場合は、授業に入っている、中学校の場合には入っていないということか。

委員

名称が違う。中学校は、相談室で子どもの相談を受ける。

市長

小学校の場合は、相談室ではなくて、教室に行っているのか。

委員

行っている。相談室でも受けられる。

事務局

心の教室の場合は、最初に、心の教室という箱物を作って、そこで相談を受けるということでスタートした。中学校の場合は、その相談室で受けるという事業。心の教育の場合は、足利市で、市単独で、教室の授業で支援ができるという設定でスタートした。児童生徒相談員は、そのいいとこ取りということで、足利バージョンとして、両方ができる。

市長

逆に言うと、中学校の心の教室相談員を、相談室ではなくて、教室に行かせてしまえばと言うのは、そんな簡単な話ではないのか。

事務局

免許がない。最初に雇用をするときに、相談業務だったので、教員免許を不要で雇用していた。

委員

現場としては、中学校はこの新しく入れたこの児童生徒相談員というのが、とってもありがたい支援だと私は思っている。だから、なるべくこの数を増やしてという風には考えている。

市長

今、児童生徒相談員は、資格は。

事務局

教員の免許がある。相談業務を行う、家庭訪問も行えるというようになっている。

市長

男女別でどのくらいの年恰好の方が、11人の平均像なのか。

事務局

全員女性だ。

市長

大体、昔、先生をされていた経験があつてということか。

事務局

そうとは限らない。

年齢的には、大体保護者くらいの年齢層である。

市長

では、40代くらいか。この辺に絡んでご意見は。

委員

今、委員がおっしゃったようことを、私もよく耳にする。是非とも、人員確保は第一優先でお願いしたいというところは、われわれ教育委員が現場から聞く話では当然と思う。よろしくお願ひしたい。

市長

お話を聞いていて、自分の子ども時代と重ね合わせながら考えるわけだが、自分が子どもの頃は、そういう先生は全然いなかった。教室から駆け出して、いなくなる子どももいなかった。40年前、50年前とは、そういう風景は全然違うと思う。

委員

私もよく校長室から追いかけた。職員室にインターホンが入り、今出て行ったと言うと、走って行くというのがしょっちゅうあった。それに限らず、いろいろなクラスで、担任だけでは見られない場合、誰かがいないと授業がやれない。そういう風景は、確かに昔はなかったと思う。

市長

そういう場面は、小学校6年間、中学校3年間のうち、確かに記憶にない。

委員

今日、この会議の前に、いじめストップアドバイザーの先生とお話をしてきました。先生は質的には、昔もそのような子もいたが、数は増えているという話をされていた。

私の個人的な体験だが、私は25年前に児童養護施設に勤め始めて、家庭の

ない子どもたちがいるというのは、信じられなかった。その子たちが表す特徴、これもまた信じられなかった。10年くらいたってから、自分が子どもを産んで、育て始めた時に、施設の子どものみみたいな子が、自分の子どもの周りで生活していることを何となく感覚的に感じた。それに、家庭が力を持たなくなってきた。それをそのままにしていたことが、今の状態を引き起こしてしまったのかなと思う。

いじめストップアドバイザーの先生のお話ですが、今の子どもの特徴としては、孤立感が大きい子が多い、人とつながれない子ども、子ども達っていうのはギャングエイジとも言うが、つるむことが仕事だが、つるむこともできなくなってきた子ども達が多い。これは教育長もおっしゃっていたけれども、自尊感情が低い子ども、あと、家庭の方になると、面倒は見ないけれども要求だけが高くなっている親、家庭そのものがホッとできる家庭でない家庭というものが増えてきたのではないかというご意見だった。それまで、学校が補充するのかもしれない問題もある。

私も昨年全国の教育委員会の集まりに出させていただいた時に、コミュニティスクールのグループに入らせていただいて、話に加わらせていただいた。日本全国から集まっている教育委員の方が、口々におっしゃっていたのは、家庭の問題のことだった。これは教育の話なのに、ここでもやはり家庭の話が出てしまうのかと思った。足利だけではないということがはっきりわかった。だから、学校がどこまでやるかというのは、本当に覚悟次第だと思うが、やはり子どもが育つのに一番大切な、安心とか、自信とか、自由というものをやはり保障してあげなければ、その子たちが大人になった時に次の世代には安心や自信や自由は与えられないと思う。本当に町づくりは、人づくりだと思うので、是非ここに力をかけていただきたいと思います。

市長

まさに、お子さんのお父さんである委員に、その辺のご自分、周りのPTAの仲間と、親としての実感についてなど、何でもよいので聞かせていただきたい。

委員

やはり、われわれ親世代も、社会状況が変わってくる中で、今、いわゆる格差社会だなんて言われているように、いろんな方が様々な形で関わってくる。個人で考えれば、すごくいいことをされている方も多いが、まとまってみた時に、見方を変えると、迷惑な方になっているとか、あるいは、いろんな意味で協調性があるようであり、ないような、そういう親世代がまた子世代にも同じように影響しているのかなと思う。先ほど話に出たとおり、なにかことがあると、家庭が駄目だからという話はよく聞く。いいところもあるけれど、悪いと

ころも多い、ただ、家庭が悪いからといって教育現場が逃げられるわけではないと思う。

そういった中で考えるときに、先生方もいろんな状況に応じて、いろんなことをやっていかなければならない場合には、やはり、人がそれなりに必要になってしまうのだろうと思う。やはり、先生方は、そんなに昔と変わっていないかなという気がする。ただ、社会が大きく変わっていく中では、先生方の資質も上がっていかねばいけない。昔の先生像ではいけない部分がある時に、やはり、いろいろな方々の補助であったり、そういったものを受けながら、スキルアップしていくという、土壌を作っていくってあげなくてはいけないのではないか。こういった補助の方であったり、あるいは補助の方がいることでできた余裕であるとかを研修にあてたり、そういった所から学校が変わってくれば、保護者の方も引っ張られる方も多いのではないかと思う。親を変えなければとはいいますが、そう簡単には変わらないと思う。そういう意味では、やはり教育行政として、どこに力をかけるかということ、学校を変えていくということにあてていただきたいなど、一保護者としては考える。

市長

本当に親が変われば子は変わると、前の足高の校長先生も言っていて、その通りだが、今は、学校が変わることによって、つられて親が変わるみたいな考え方もあるのだろうし、本当に一筋縄ではいかないのかもしれませんが、教育長は親を変える方法について、どうお考えか。

教育長

個人的にこういう立場で考えた時に、親が変わる、学校が変わる、それだけではなくて、一人の子どもが生きている、生活している、それはどこでというと、家庭があって、学校があって、地域社会がある。それぞれの役割というのを、もう一度、根っこを確認したいと思う。

学校はやはり勉強するところ、学ぶところ、そのために先生方が頑張っている。それから、家庭は、やはりホッとするところ。帰って、ただいまと言ったときに、共働きで親御さんがいない家庭であっても、やはり、親が帰ってきたときには、短い時間でも団欒の時間がとれるような、そういうホッとする場。もう一つ、家庭にお願いしたいのは基本的な生活習慣と言いますか、早寝、早起き、朝ごはん、夜遅くまで起きて、次の日、眠い顔して朝ごはん食べないで、学校に来て、勉強ができるのかということもある。家庭によって事情はさまざまだが、家庭はホッとする場と基本的な生活習慣、これをお願いしたいと思う。では、地域はということになるが、私は、地域の皆さんには子どもたちに声をかけてもらいたい。一声かけてもらいたい。「おはよう」でもいいし、「今

日は早いな」でもいい。それと地域の方をお願いするのは、育成会をはじめ、子どもにいろいろな体験をさせてもらえる、体験の場でなくてはならないかなという気がする。去年から、家庭教育懇談会に出していただく中で、あいさつの中で、家庭にはこんな家庭をとということで、具体例を出したり、地域の皆さまもいらっしゃいますので、夏休みに向けては、体験をさせてくださいとか、お話をさせてもらった。随時どこかで発信をしていかなければならない、そんな風に思っている。

市長

委員はどうか。

委員

ちょっと論点は違うかもしれないが、今の子どもたちはすごく恵まれていると思う。物質的にも、いろいろな環境の面でも。その恵まれていることが、もしかすると、むしろ、子どもたちの精神的な育成にはどうなのか、という現象が現れていることがあるのではないかと思う。

昔は、子どもは子どもなりに、家庭の中で役割があった。今、小学校、中学校の子どもがいないので、それぞれの家庭がどうなっているかということはよくわからないが、もしかすると、そういった時間的拘束、労働的な拘束を受けているということが、どの程度あるのか。昔は、せざるをえない中でしていたこともある。あるいは、子どもたち同士とか、近所も含めて、やはり、一対一で向き合うと、絶対同じ考えはもっていないから、行き違いや擦れ違いがあったり、ならば、どこかで妥協したり、落とし所をつくったり、一つの折衝をすすめる中でコミュニケーションができた。他の人と意見を合わせる必要がない、一人っ子のお子さんならば、友達と遊ぶ必要もない、自分ひとりで遊び方はある。そうすると、対外交渉能力と言うか、二人いれば当然意見の食い違いの中で、どこかで妥協したり、辛抱したりしなければならぬことがあるはずなのに、そういうことも、もしかするとしなくて済む。それが今の豊かさの、頭の中で考えると、デメリット、不利益があるのではないかと思う。

一番心配するのは、「かしこく、やさしく、たくましく」とおっしゃっておられるが、本当にそのとおりなのか。そのたくましさは、対人関係の中で、自分を活かし、相手も活かし、その強さがたくましさだと思う。ある意味それは、思いやりの心をもつ。もう二人以上でコミュニティをつくることが少なくなった今では、もしかすると、そのたくましさの原点を失いつつあるのではないかと思ってしまう。学校の中で、家庭の中で、地域の中で、どうやって対人関係、コミュニケーション能力をうまく用いることができるようにしていくのか。三十年後は、今の小中学生が、日本や足利の担い手になっていなくてはならない。

その時に、次の世代を託した子どもたちが、本当に日本や足利を背負って生きていけるのかというのは、心配になってしまう。われわれが子どもたちに次の世代を託して、任せたとと言えることは、必要だと思う。一朝一夕にはできなくても、そのようなことができるようにならないと思う。

市長

兄弟が少なくなったことが子どもにどのような影響を与えているか。委員は、現場にいて感じることは。

委員

ある。我慢が出来ないというか、耐性が全然違う。兄弟がいることで、家では一つの物を分けて食べるという感覚が、一人っ子や二人っ子だとない。みんな自分の物ということで、いろいろなところで我慢することが、日常の中で減っていると思う。今、学校では兄弟学年というのをつくって、たとえば、一年生と六年生を兄弟学年にして、一緒に掃除をするとか、一緒に給食を食べるとか、一緒に遊ぶとかの機会をつくって、そのような感覚を少しでも養うようなことはやっている。それは、大変好評で、卒業する時に、下の子がプレゼントをしたりという関係も出てきたりしている。そのような、現場で作れる部分もあるが、現実として、家族の場合は、みんなで力を合わせてやるのが、日常的に減っていることは感じている。

教育長

今の話に関して、紹介したい話がある。これは5、6年前だったと思うが、宇都宮の文化会館で、堀田力さんという方がおいでになって話をされている中で、面白い話を紹介してくださった。文部省に依頼されて、会議の席に出た時に、ある方は今の子ども達の問題行動の原因は学校にあるという意見、逆に、ある方は、家庭が基本的な生活習慣を身につけていないからだという意見だった。そこで、堀田先生は、少子化に原因があるのではないかということをおっしゃっていた。今の子ども達は、何でも物を与えられるし、豊かになっている半面、親は、人数が少ないから、能力以上のものを子どもに要求してしまう。今、委員が言われた兄弟関係の中でも、兄弟が多いときは、物の取り合いでも、相手を思いやることも学ぶ。それが、一人っ子や二人兄弟の中でどれくらいの子どもの問題行動に結びついているのだろうかという話だった。ある動物園の話もされていた。ある動物園で、いつもたくさんの子どもの産まれる動物が、たまたま1匹しか産まれなかった。そこで、親は可愛がって、一生懸命なめて育てた。そうしたら、最後は、抵抗力もなく産まれた動物の赤ちゃんは死んでしまった。いわゆる、舐め過ぎ現象とおっしゃっていた。学校がよいとか、家庭

が悪いとかではなくて、今の少子化が大きな影響を与えているのだということを紹介したい。

市長

今日はもう一つテーマにしたいことがある。ちょうど2～3週間前に私もたまたま見ていたNHKの番組で、学校の先生の忙しさ、特に、部活動の顧問活動と学校の先生の多忙さということのニュース番組があった。新聞報道を見ても、そういった視点でのニュースが大変続いていると思っている。その辺のことをもう一つテーマに残りの時間で意見交換を行いたい。

お手元の資料の、外部指導員の協力のことや、民間企業へ指導者の派遣を依頼する等、部活動のあり方、特に多忙感との兼ね合いのところではいろいろなニュースや話題が出ているので、その辺のことについて話題を移したい。

足利市の状況について、教育長からご説明をいただきたい。

教育長

まずは、部活の意義を確認させていただきたい。技術の向上だけではなくて、子ども達が豊かな学校生活が送れるというもので、とても意義があると思う。特に中学生という子どもの側に立って見ると、仲間とのきずなを深める、将来の友人を得ることができるという意義がある。先生方にとっては、普段の授業の中では見られない子どもの一面を知ることができる、子どもとの関係づくりに意義を持てる。そこで、今の現状は、先生方が今まで以上に幅広い業務を担わなければならない、多忙な毎日を過ごしているが、その中でも部活に取り組んでいる先生方がたくさんいらっしゃることに感謝している。中には、自分が担当している部活について経験のない先生もいらっしゃる。あるいは、家庭の事情でなかなか部活に顔を出せない先生もいらっしゃる。また、安全に気を付け、子どもたちが怪我しないようにということで見守っている、そういう顧問の先生もいらっしゃる。先生方それぞれで、思いは様々だという気がしている。

そのような中で、足利市では約60名の外部指導の方をお願いしている。この皆さん方のおかげで、専門的な目での確に技術指導もいただいている。生徒の競技力の向上には大変お世話になっているが、また、一方で顧問と外部講師の複数の目で子どもを見てもらえるということから、安全面にも配慮されている。外部指導の方には、各学校から推薦をされて、市教育委員会で委嘱という形をお願いをしている。

部活については、そのようなところだが、先生方の多忙感というものは、部活に限らず、数年前の栃木県のアンケート調査を見ると、一番多いのは校務分掌が大変だということだ。いわゆる、市教委や県教委、国の方に報告する提出文書、これが非常に多い。特に、小さな学校は一人でいくつも校務分掌を持つ

ている方がいる。そうすると、たとえば、校務分掌の中で出張ということがあれば、大きい学校に比べると、二倍三倍と出張回数が増える。そういうことも多忙感に出てくると思う。それ以外にも、保護者との関係で、意見が食い違ったために、その対応のために時間がかかるという、そういった多忙感などもある。

市長

部活に限らず、多忙感ということが一つ、よく言われる。学校現場、特に学校の先生を取り巻く状況の話なのでしょうが、忙しくても徒労感があるのが一番良くないという、忙しくても充実感があれば良いのだと思う。その辺を、委員に現場の様子を紹介していただければと思う。

委員

たくさんさんの時間仕事をしていても、多忙感を感じないということは、そこに生きがいを見つけて、やっている時はそうだし、随分そういう先生はいらっしゃった。現在、多忙感が出ているというのは、予定外のものがどんどん入ってきています。一年の時間は変わらないが、いろいろな休日が入って、授業ができる日は昔より減っていると思う。社会の状況に応じて、これも学校にやりなさいということで、カリキュラムに入れてくる。でも、現場はよくやっていると思う。カリキュラム自体が、すでに四月にできたときには、埋まっているわけなのに、そこに入ってくるので、それをこなしていくことも大変だし、それにかかわる校務分掌上の問題も出てくる。そのような意味で、昔と違った多忙感が出ていると思う。たとえば、中学校だったら部活にとられる時間がとても多いと思う。資料 No.2 の 4 ページを見ると、授業準備の時間が足りないが、中学校で 84 パーセント、授業の準備ができないということは、授業がどうなるかということはあるだろう。時間というのは絶対に延ばせないで、そこに何を入れたらいいのか、セレクトして、いらぬものはカットしていくという作業をしないといけない。

では、学校にとって何が一番大切かということ、授業だと思う。授業に関わる、子どもに関わる部分を中心に、いいことはいいのだが、いいからといって、何でも取りいれればよいというものではない。現場もそうだが、みんなが、これは学校でやらなくていいのではということ、削ってあげないといけない。子どもに関することだけは十分にできるような時間配置、システムにしたいと思う。そこがしっかりしてくれば、教育が充実してくると思う。

市長

私も、市長になってから何度もやめる勇気とよく言っているが、なかなかやめない。

市長

校務分掌というのは、端的に言うと、報告文書をつくることなのか。

教育長

校務分掌は、たとえば特別活動や道徳などの主任が決まる。そうすると、外部から、道徳であれば道徳に関するいろいろな調査が来る。場合によっては、県から来たものと国から来たものが全く同じ調査だけれども、回答は別々に出すなど。校務分掌上、特に、提出文書、報告文書、これに追われていることが多い。空き時間にやろうとしていたことが、他のなにかが入ってくるとそれができずに、翌日に回す、あるいは、自宅に持って帰ることになる。そういうことが、子どもに直接関わる内容ではないので、やりがいというか、充実感がない。それが負担感として、いわゆる多忙に拍車をかけている。

市長

親の立場から見て、委員はどうか。学校の先生の多忙感はどのように目に映っているか。

委員

多忙は、間違いなく多忙だと思う。部活動がという点については、先生によるのではないかという気がする。いろいろなところで、うちの子どもが、顧問が変わったりすると、部活が、いきなり忙しくなったり、あまりやらなくなったりということを聞く。先生が変わるとそうなるということは、指導方針によることなので、一生懸命やっているから、こっちは準備ができないというのはおかしい。話を聞くと、一生懸命、誠意をもってやっている方の方が、授業の成立もいい形が多いような話を、保護者の方からよく聞く。

先ほどお話にあった校務分掌とか、保護者側からのいろいろな要求も細かくなっている。たしかに、多忙感というと、先生のところにいろんなものが入ってくる。私は、一般企業をやっているが、まったく同じだ。お客さんから予定が出ていても、あれをやって、これをやって、これはだめと言われることもある。しかし、それに対応しなければならない。先ほど、委員がおっしゃっていたように、何かを削る、あるいは何かを改善して、いかにスピーディに、いかに要求に応えるかということを考えてやっている。目的を、子どもたちにいかに質の高い授業をと考えるときには、そういう改善であったり、効率よくやっ

ていかなければならないと感じる。多忙感は学校に限らず、いろんなところで、社会として増えているのではないかと感じる。

市長

他に、なにかご意見は。

委員

委員のおっしゃったとおり、先生次第というところもある。教員を目指す方が、自分が受けた教育を後世に伝えたいという思いがあるということが多いと思う。特に、中学校で部活動をやって、自分の健全育成にいい影響をもたらしてくれたという思いが多い先生も多いのではないと思う。私の知っている限り、本当に一生懸命、部活動の顧問をやっている先生も見ているし、本当に子どもたちの健全育成のためには、部活動は必要だと思って、一生懸命、休日も夜も熱心に指導してくださる先生もいらっしゃる。そういう先生がいらっしゃるということは、私たちにとって、とても望ましいと思うし、どの先生にもお願いすることではないと思うが、少なくともそう思ってください先生がいるということ素晴らしいと私は思っている。

私が委員になった時に、事務仕事の少ない学校現場にしてくださいと言われてた。必要な事務処理というのも当然あると思うが、それが過剰な事務仕事になっていると、当然それは最終的に子どもにいい影響が及ぼさないことがあると思うので、それが、市教委側にあると問題だ。

市長

市教委側から説明などあれば。

事務局

市教委としてもできるだけ、事務仕事が少なくなるように進めているが、県や国からの調査がとても多い。それと、市役所のいろいろな課からのお願いも大変多くて、校長会などでお願いすることもある。新規でないものは、校長会でお願いしないで文書で出しているが、新規のものは必ず校長会等をお願いをしている。それが年間相当ある。以前、指導担当の主幹が調べたら、その主幹が在任中で何々教育が20増えていたという話があるが、今はその比ではないという話をしている。何かが起こるたびに学校の何々教育が増えていて、今、指導係の書類が、棚に入らない。私が入ったころの倍のスペースで、入らなくて裏側にも書類がいっぱい積んである。一生懸命われわれがつくると、全部学校の首を絞めているのだなと言いながら作っている。

市長

気がついたところでやめていく勇気を、みんなで声を掛け合ってやっていった方がいい。やめていかないと、増えるばかりなので。

委員

その部活の件で、資料 No.2 の 2 ページの日本の中体連の調べでは、各地の教育委員会が外部指導員を一元的に確保し、学校からの要請によって派遣する仕組みをつくるのが理想だと話している。本当にこれができたら理想だと、私も思うが、理想は理想で、なかなか現実には難しいと思う。では、今、部活でできることは何だろうと、まず足元を見ると、3 ページの栃木県の中体連の申し合わせ事項がある。3 つあって、第一、第三日曜日は、部活動は行わない。二つ目は、その他の日曜日に行く際は、半日とする。週に一度は休養日を設けることが望ましい。これは足利ではどれくらい守られているのか。これをしっかり守るものとしていけば、週に一回休養日があればずいぶん違う。休みも、第一、第三日曜日がある。先生だけでなく、子どもも大変だ。自由に思考したり、何かをするという時間が取られている。せめて、足利ではこれをということではできないものか。現実でやっているかもわからないが、足利ではこれは守られているのか。

事務局

県の方でもそのような申し合わせをして、市の方でも基本的には申し合わせしている。週に一回休みを取るようにということをしているが、大会の前などではなかなかできない。

市長

子供も親も熱くなってしまうのだろう。

事務局

以前から比べると、確実に週に一回くらい、水曜日に部活をなしにするという中学校が増えている。ただ、大会の日程など、時期などの問題がある。

委員

ここら辺が徹底されてくると、ずっと違うと思う。

市長

この件について、ご意見があれば。そろそろ時間なので、よろしいか。

日程第2 議題(2)

その他

市長

では、その他ということで、他に皆さんからご意見等ございましたらお願いしたい。

委員

(質疑なし。)

市長

本日の議題は終了する。

○閉会